

Hello! FUJISEI

No. 78

少子・高齢化の進展や医療技術の進歩などにより、死亡に関する状況もこの50年間で大きく変化しています。

〔平成23年版 厚生労働白書〕は第1部で「社会保障の検証と展望～国民皆保険・皆年金制度実現から半世紀～」と銘打ち、この半世紀を振り返っています。

結核をはじめとする感染症は、衛生水準の向上や抗生物質による治療が行きわたることによりかなり克服され、かつて国民病とまでいわれた結核による死亡者数は大幅に低下しています。疾病構造は急性疾患から慢性疾患へと大きく変化したのです。脳血管疾患による死亡も大幅に低下してきており、年齢調整後の死亡率をみると、結核、脳血管疾患を中心に大きく低下してきていることがわかります。他方、高齢化に伴って、死亡数そのものは上昇傾向にあります。特に、がんの死亡数が上昇しており、心臓病、肺炎も高齢化の影響で死亡数が上昇しています。

また、人口構成の変化

50年で死亡の状況は大きく変化

慢性疾患が悪化し、要介護や長期入院に

の反映でもありますが、死亡者数のうち75歳以上の高齢者の占める割合が上昇し、14歳以下は大幅に減少しています。

1947（昭和22）年には14歳以下の死亡者数が37.5万人、15歳から64歳が46.3万人でしたが、1961（昭和36）年にはそれぞれ7.2万人、25.4万人となり、2010（平成22）年には0.4万人、17.21万人（ともに概数）まで減少しました。

他方、80歳以上の死亡が1947年には6.24万人、1961年には11.9万人でありましたが、2010年には66.3万人まで上昇しており、死亡者数の過半

数を占めるに至っています。死亡率も1982（昭和57）年に6.0まで低下しましたが、高齢化の影響で2010年には9.5まで上昇しています。

高齢者は、複数の疾患を持つことが多く、その多くは、かつては「成人病」と呼ばれ、今日では「生活習慣病」と呼ばれる慢性疾患です。脳血管疾患による死亡自体は医療技術の進歩等により大きく減少しましたが、脳血管疾患をきっかけに要介護状態となるなど、慢性疾患が悪化した場合には介護等が必要となる場合も多く、入院期間も長期化しやすい傾向があります。

年齢階級別に見た死亡者数の推移

